

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 6月19日 11:13AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,000~72,000 円
(TOPIX) 3400~4100

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000~52,000 ドル
(S&P500) 6300~7700

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~30,800
(ナスダック総合) 20,700~27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000~102.720

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

6月18日の日経平均は6日続伸、一時71,398円と最高値を更新しました。筆者にとり「黄金分割の日」に、89年12月高値から08年10月安値までの「下げ倍返し」[70,920円]を達成しました。

アベノミクス以降でみると、2万円から3万円への大台替わりまで5年10カ月、4万円まで3年1カ月かかりましたが、5万円まで1年7カ月、6万円までは半年足らずと、大台替わりのペースが加速しています。初めて6万円を付けた今年4月24日から2カ月足らずでの7万円乗せ(6月16日)は、市場が2000年ITバブル当時のような狂乱状態にある証左といえます。

なお今月(26年6月)は、08年10月大底から212カ月(17.6年)目です。株式市場には17年前後の長期転換サイクルが観測されることをここに銘記しておきます。

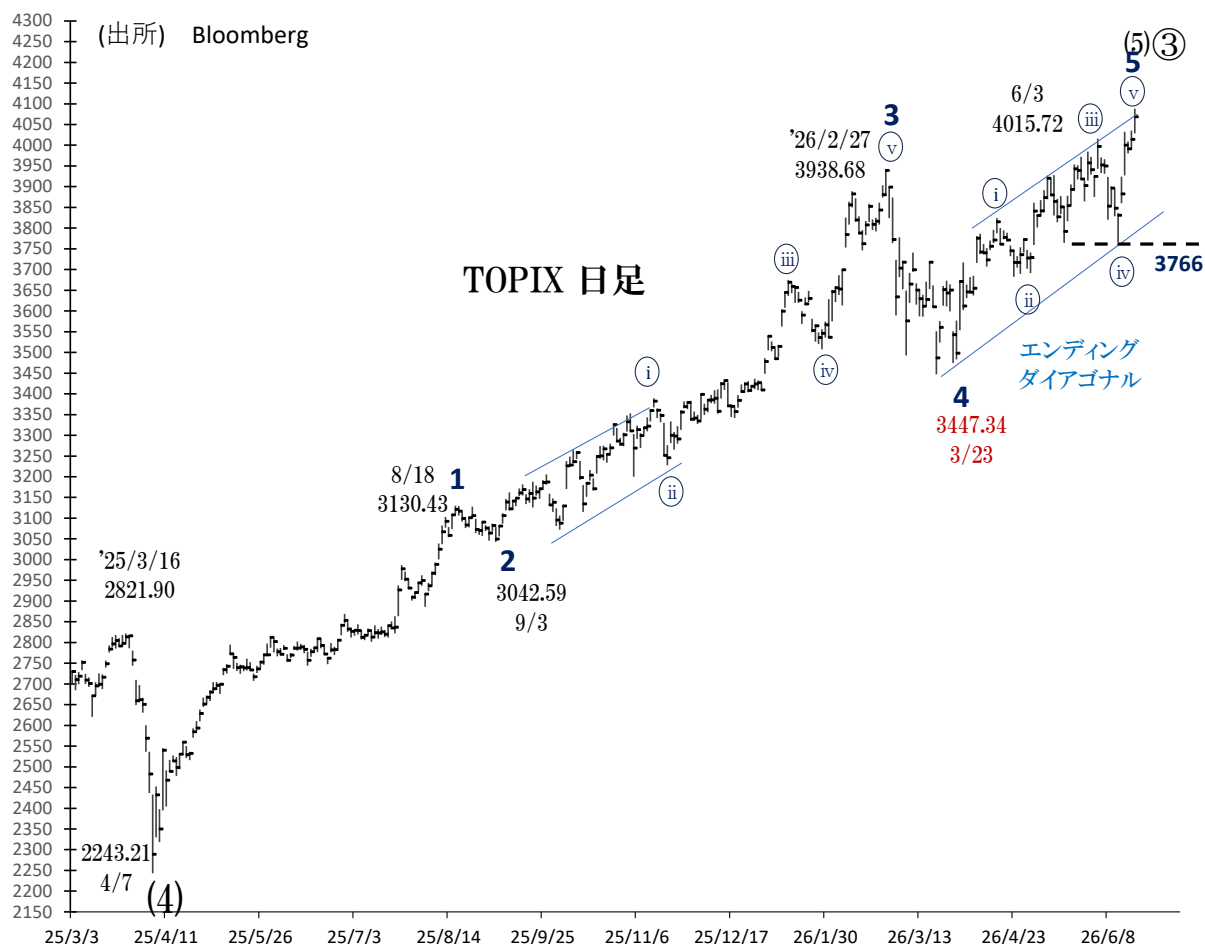
プライマリー級③波は最終盤にあり、ひとたび④波の調整に入れば高値から38%~50%の下落となるでしょう。

3月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けるでしょう。

現行サイクル始点の3月31日からフィボナッチ55日目は6月22日。現行サイクルの13週目(6月第4週・6/22-26)にも当たります。来週は③波天井を示現するタイミングとして注目度が高いといえます。

高値示現後は、年末～来年3月のサイクル終点に向け株価は下落基調を迎えるでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020年以降の補正後)は45週±8週(37週～53週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は10%～26%(平均17%)。



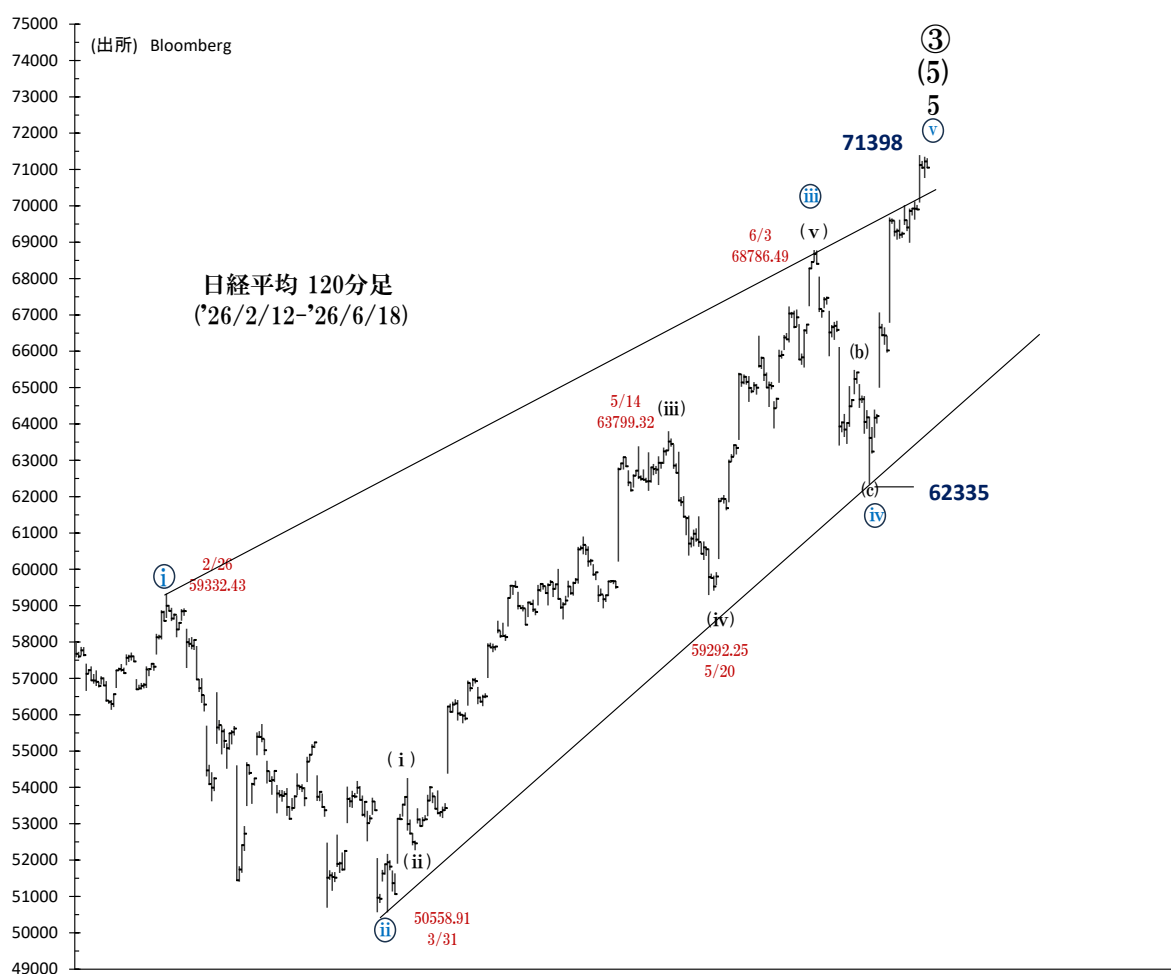
[TOPIX]

6月18日は一時4088まで上昇し最高値を更新しました。

3月安値からの第5波(ダイアゴナル)において、3766(6/11安値)からはマルv波の上昇に位置付けられます。このマルv波完成を以て、コロナショック底から6年余り続いた強気トレンドも完成し、プライマリー④波の調整入りとなるでしょう。3766を割るとマルv波終了の合図となり、当面は3447(ダイアゴナル始点)に向けた動きが想定されます。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー①波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。

なお4099を上回ると、上記ダイアゴナル中のマルiii波が最短になってしまうため、目先波動カウントを修正する必要があります。この場合は4200まで上昇余地が生じます。



[日経平均]

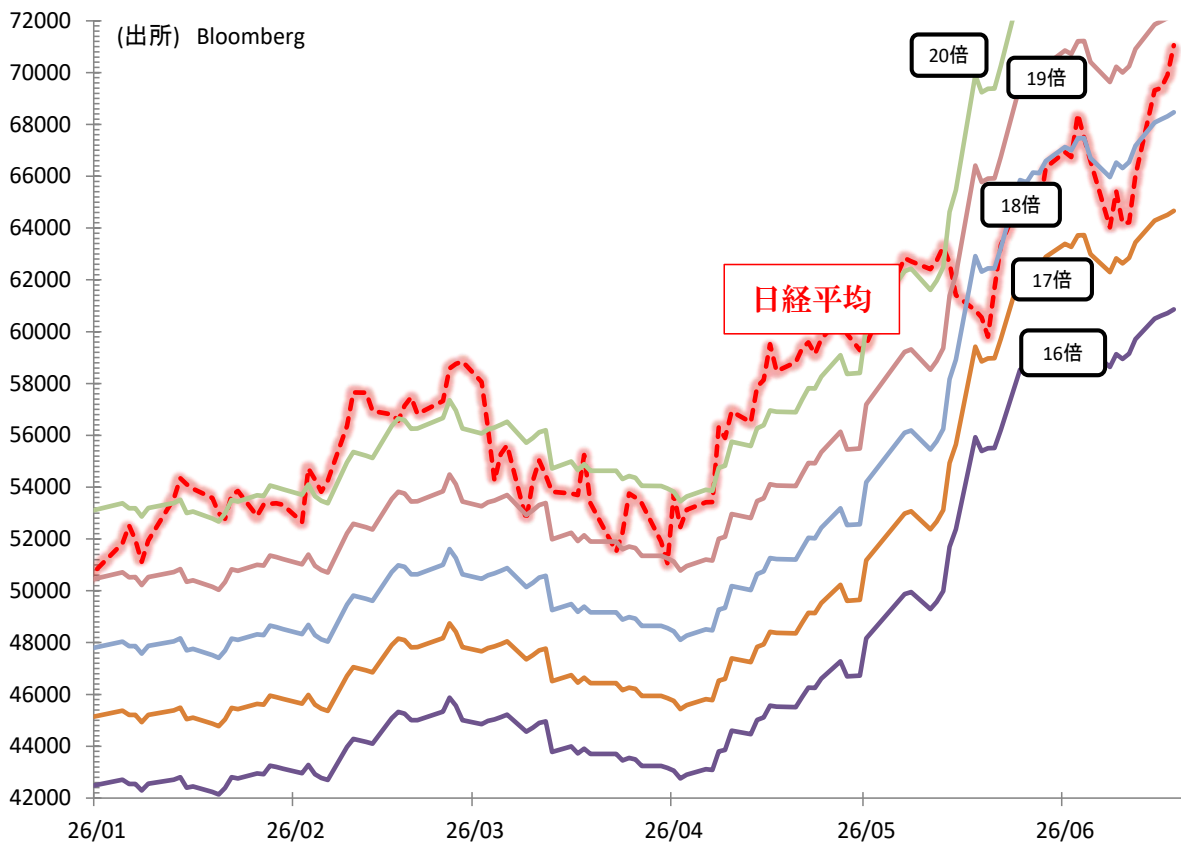
62,335 円(6/11 安値)から、マイニュート級のマルチ波による上昇とみています。その完成を以て、2020 年 3 月底からのプライマリー③波も完了します。

6 月 18 日の日経平均総合かい離率は 61.58%に広がりました。これは 2013 年 5 月以来 12 年ぶり、1970 年以降で 2 番目のかい離です。このように歴史的な上昇過熱に対する反動は、まもなく起こるでしょう。

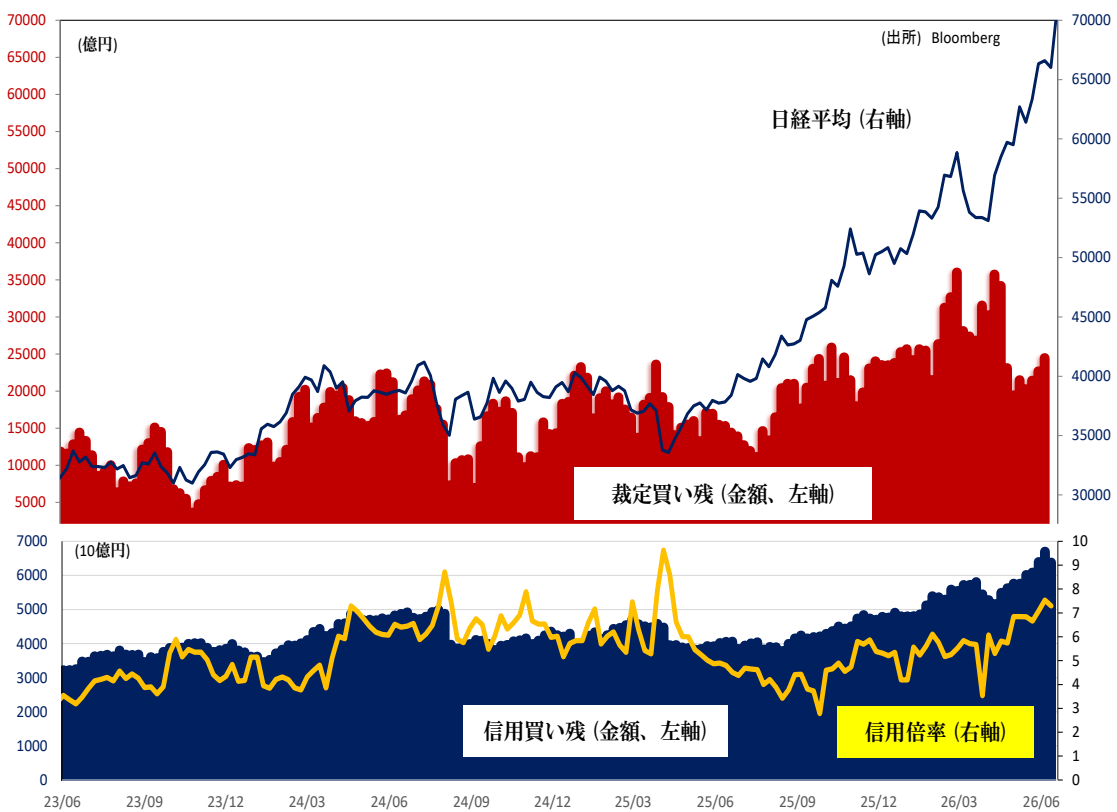
※日経平均と、25 日 MA・75 日 MA・200 日 MA からのかい離率の合計

[予想 PER 別の日経平均水準]

6 月 18 日の日経平均予想 PER は 18.68 倍、予想 EPS は 3803 円と過去最高を更新しました。なお 2011 年以降の 15 年間で、日経平均の予想 EPS は大きく増加していますが、その約 80%は「円安効果」で説明がつかず。



[裁定買い残と信用買い残] (6月12日時点)



NYダウ・S&P500



【NY ダウ 30 週足 エリオット波動長期分析】

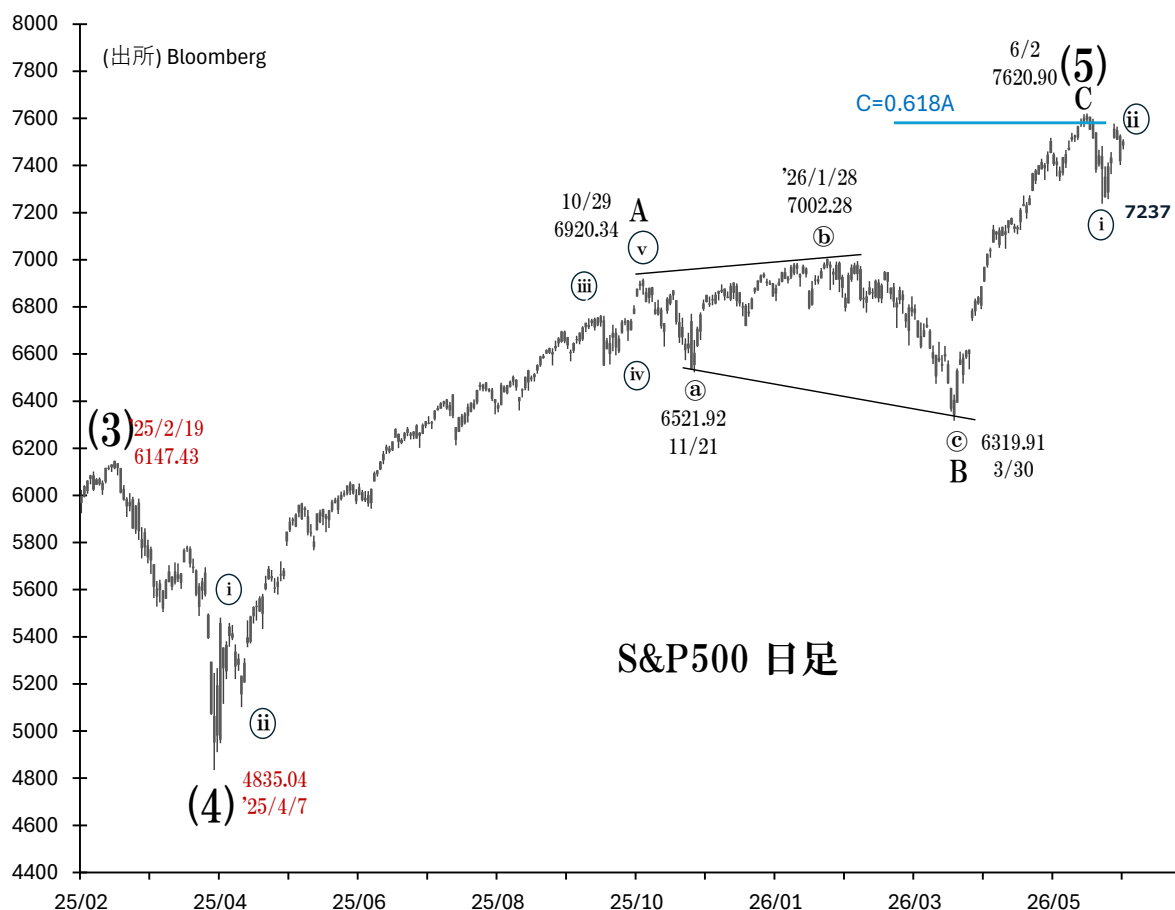
2020 年底を起点とするプライマリー⑤波は「エンディング・ダイアゴナル」(強気相場の最後に現れる転換パターン)を形成しており、その完了は近いとみています。

ダイアゴナル上限(来週は 50,192 ドル)を週末値で割り込むと、スローオーバー(throw-over)が確認され、それは天井打ちの最初のサインです。

通算 6 年余りの天井パターンが完成すると、その後 2~3 年の内に NY ダウはパターン開始点(18,213 ドル)へ向けて下げる可能性があります。

【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

6 月 17 日の最高値(52,281)は S&P500 からは確認されていません。19 日の米株市場は休場のため、今週ローソク足が決まりましたが、それは上ヒゲ長く実体が小さい「流星」です。少なくとも目先のピークになる可能性があります。49,909 ドル(6/10 安値)を下回ると、調整入りのリスクが高まります。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月 2 日高値の 7620 は、A 波と C 波が黄金比になる水準[7605]を満たすものであり、ピークアウトとなっておかしくありません。

7237(6/9 安値)からの上昇がリバウンドに過ぎないなら、目先のにもマル iii 波の下落がスタートするはずで、7237 割れでマル iii 波入りが濃厚です。

一方、7620 を上回る動きとなれば、3 月末からの上昇は継続していることになります。

SOX 指数は 6 月 18 日に最高値をまた更新しました。6 月 9 日安値からの第(iv)波には、足元までに 5 つの波(i~v)が現れています。3 月末から 2 カ月半で 2 倍という驚異的な上昇も、いよいよ終わるかもしれません。



Bloomberg マグニフィセント 7 インデックス

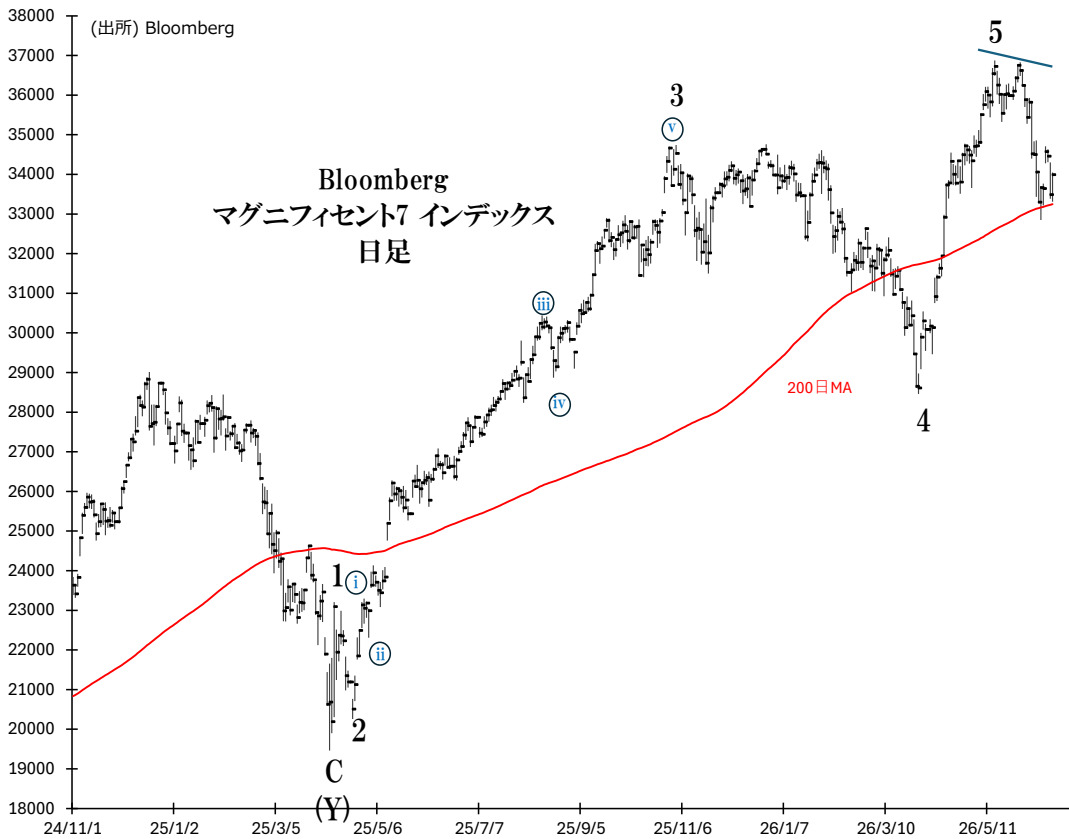
この指数が最高値を付けたのは 5 月 14 日です。それは他の主要指数より先行して高値を付けており、重要な天井パターン(未確認)とみることができます。

200 日 MA をサポートとする反発は、終わったか終わりつつあるように見えます。200 日 MA を割り込むと下げ基調が強まるでしょう。

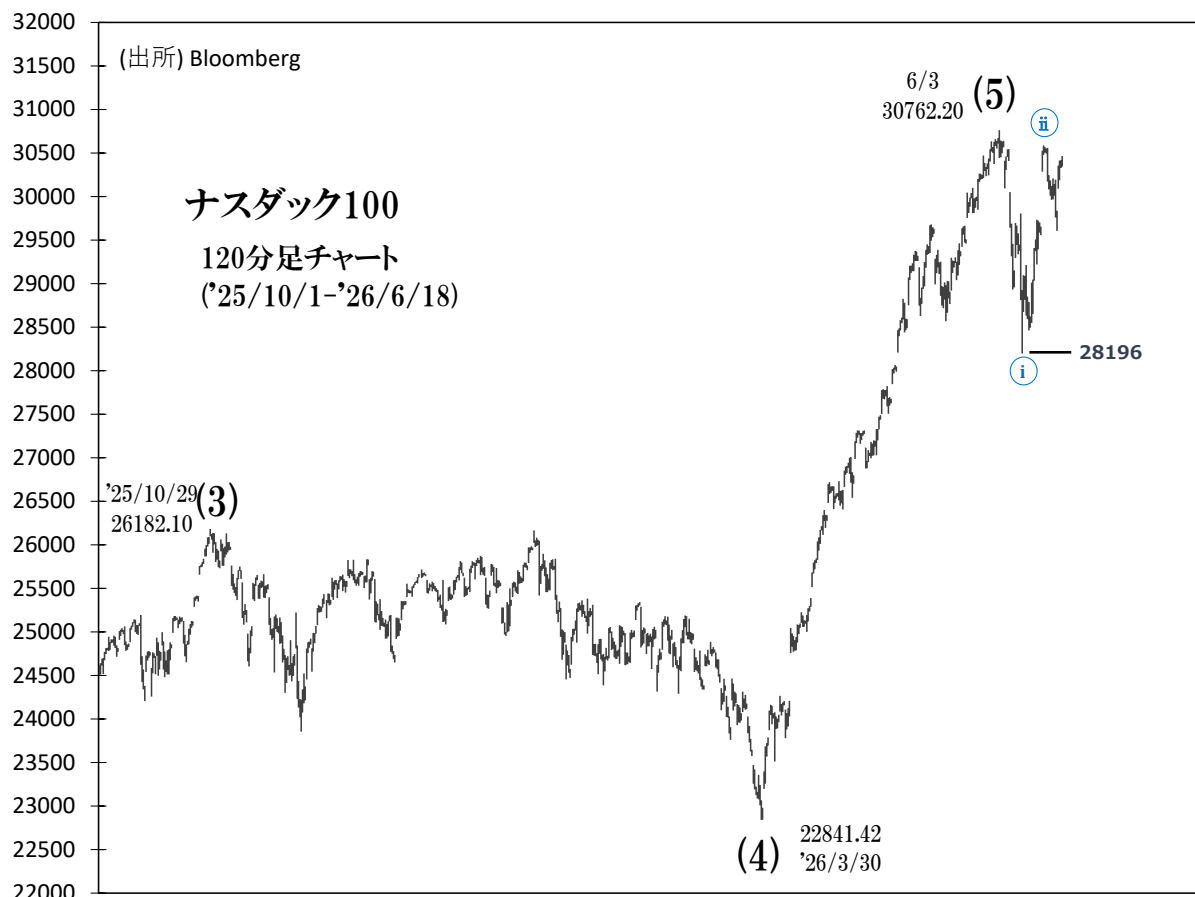
[ダウ輸送株平均] リバウンドは終わったか



[マグニフィセント7] 200日 MAを試す動き



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

6月15日はマドを空けて上昇し一時 30,587 と 30,762(6/3 高値)に迫りました)。翌日から2日間の下げでマド埋めをはたし、18日は一時 30,463 まで戻しています。

28,196(6/10 安値)からが、マル ii 波によるリバウンドであるなら、目先的にもマル iii 波の下落が始まり、早々に 28,196 を割り込むでしょう。

一方、高値を更新する場合は別の波動カウントが必要になります。

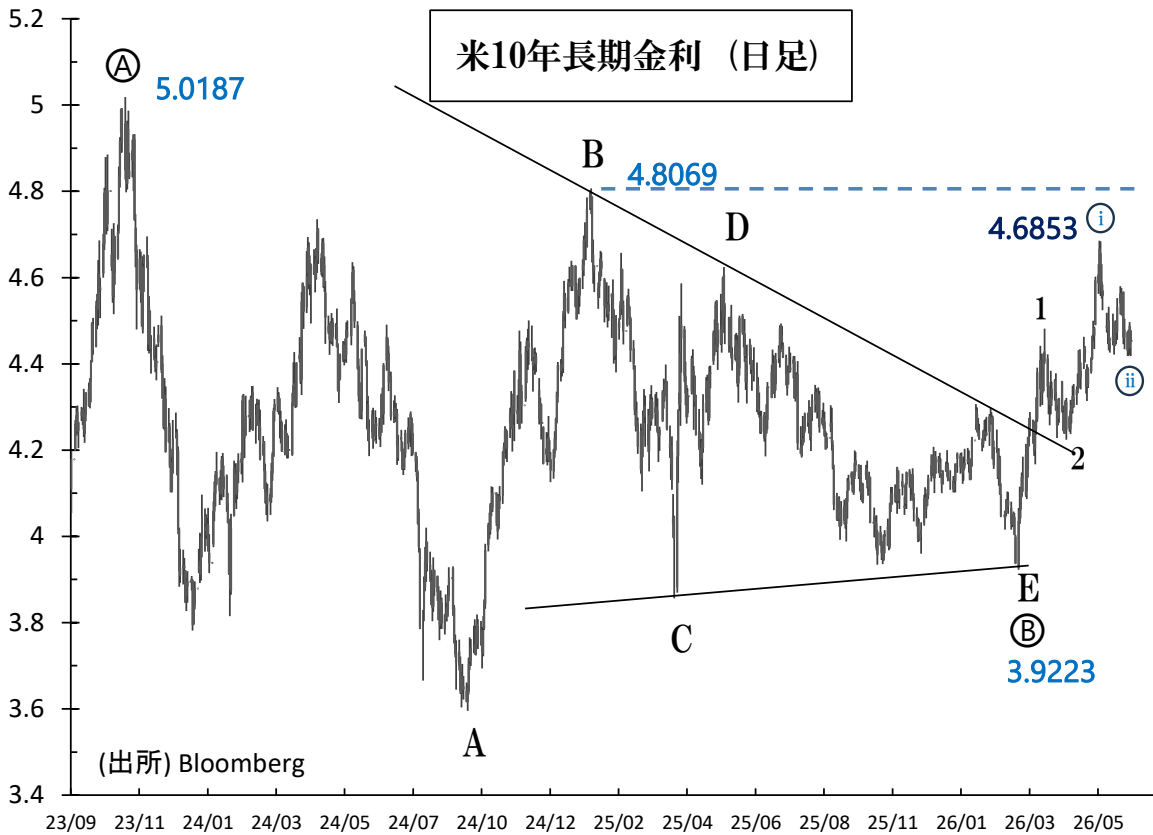
米 10 年長期金利は、今年 3 月の 3.9223%を起点とする◎波の金利上昇に入っています。

◎波は 23 年 10 月のⒶ波トップ=5.0187%を大きく上回る展開となるでしょう。

◎波の金利上昇は、今後数年続くと予想しますが、これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

この見方通り金利上昇が続いていけば、AI・半導体株のバリュエーションは低下し、株価は大きく下落するでしょう。

[米 10 年長期金利] 5.02%を上回る展開へ



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

2011年～24年のドル/円上昇は「ダブル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)」です。24年7月の161.938円からは、(X)波のドル安・円高が展開中とみられ、それは2028年まで続くでしょう。

一方、161.938円を上回った場合には(6月18日は一時161.774円まで上昇しています)波動カウントを改めなければなりません。この場合、25年4月からの上昇を(Y)波-(C)波とみなします。(C)波完成を以て、2011年来のダブル・ジグザグは完成し、その後は大きな下落(ドル安・円高)を迎えることになります。

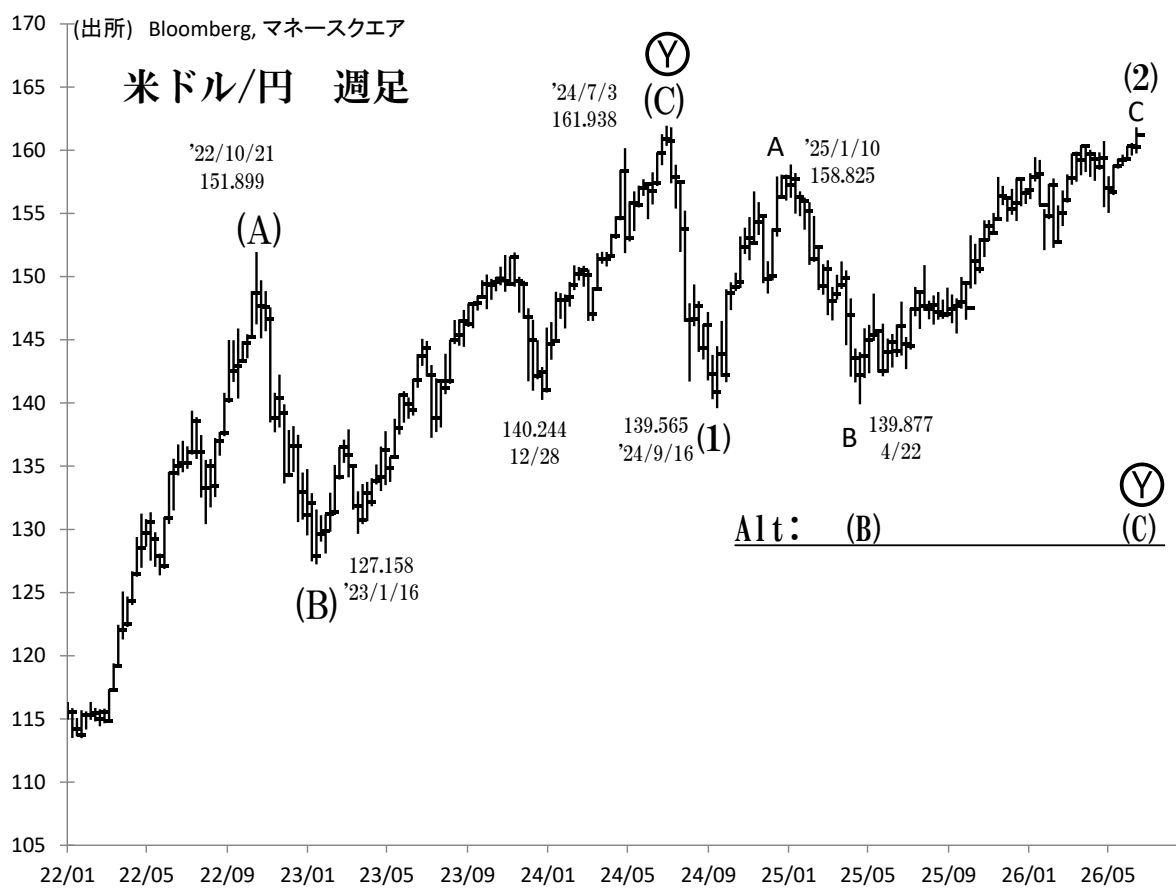
日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在1ドル=142-143円です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準より、極端な過小評価が1年以上も続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた20年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は40兆円程度とされます。



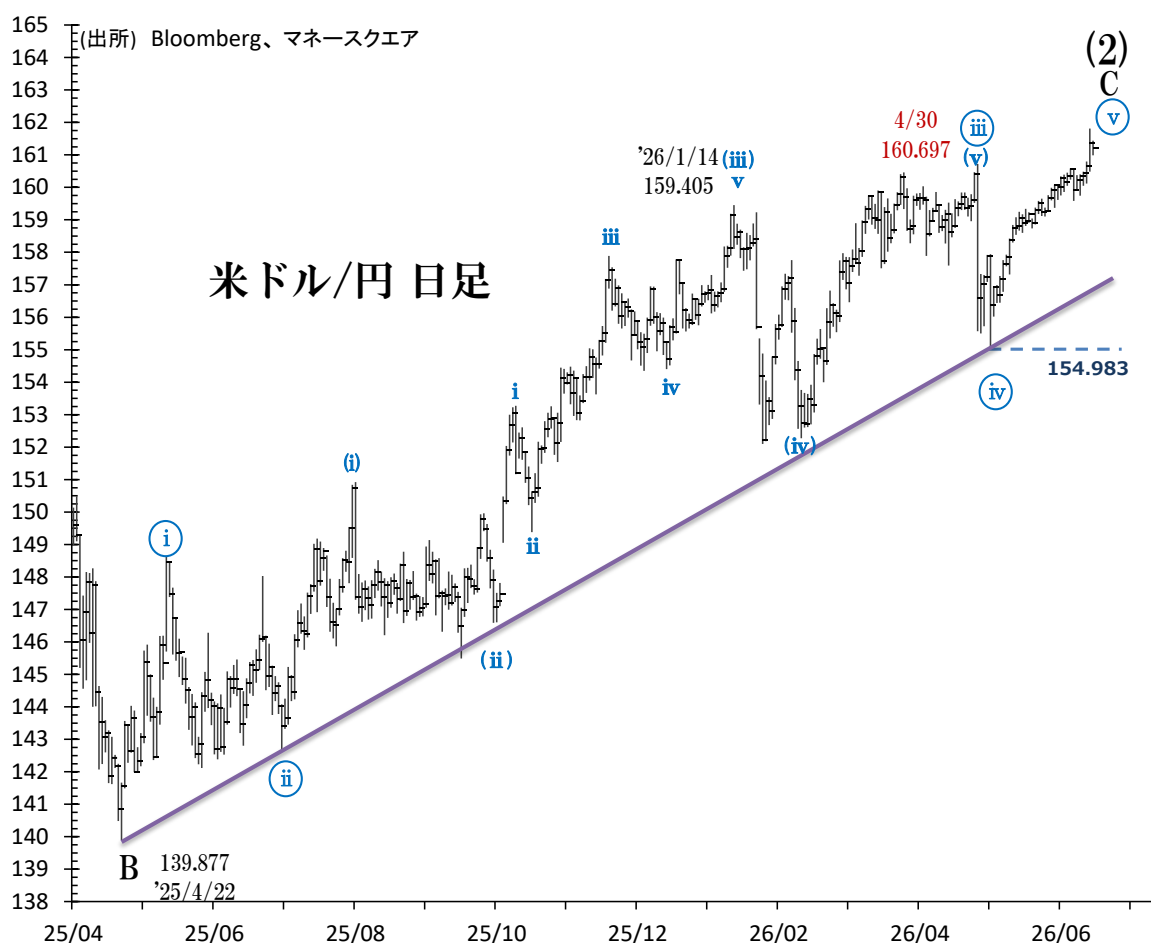
【週足 エリオット波動分析】

6月18日には一時161.774円まで上昇し、24年7月の161.938円に肉薄しました。それは24年9月(139.565円)からの第(2)波「フラット(A-B-C)」の完了点とみられ、来週は第(3)波のドル安・円高が始まるでしょう。ひとたび第(3)波入りとなれば、[140円~125円]を目指すでしょう。

161.938円を上抜いてからのオルタナティブ・カウント

22年10月(151.899円)からの(B)波はトライアングルであり、それは139.877円(4/22)で完成しました。それ以来を(C)波のドル高・円安とカウントします。この(C)波を以て、2011年からの「ダブル・ジグザグ」は完成します。

なお24年のドル/円高値を抜くと、8-9年で主な高値を付ける「8年サイクル」は一時中断となりますが、16年半ごとに主な安値が来る「16年半サイクル」は続きます。これによると、次の主なドル円安値は28年4月前後に付ける見込みです。



【日足 エリオット波動分析】

第(2)波中 C 波の上昇が 25 年 4 月(139.877 円)から展開中とみられます。それは 5 つの波(マル i~マル v)で構成されます。

154.983 円(5/6)からのマル v 波は目的的にも終わるでしょう。157 円を終値で割る動きは、25 年 4 月以来のサポートラインからの下入れ開始の合図となります。

金利差からのドル/円推計値

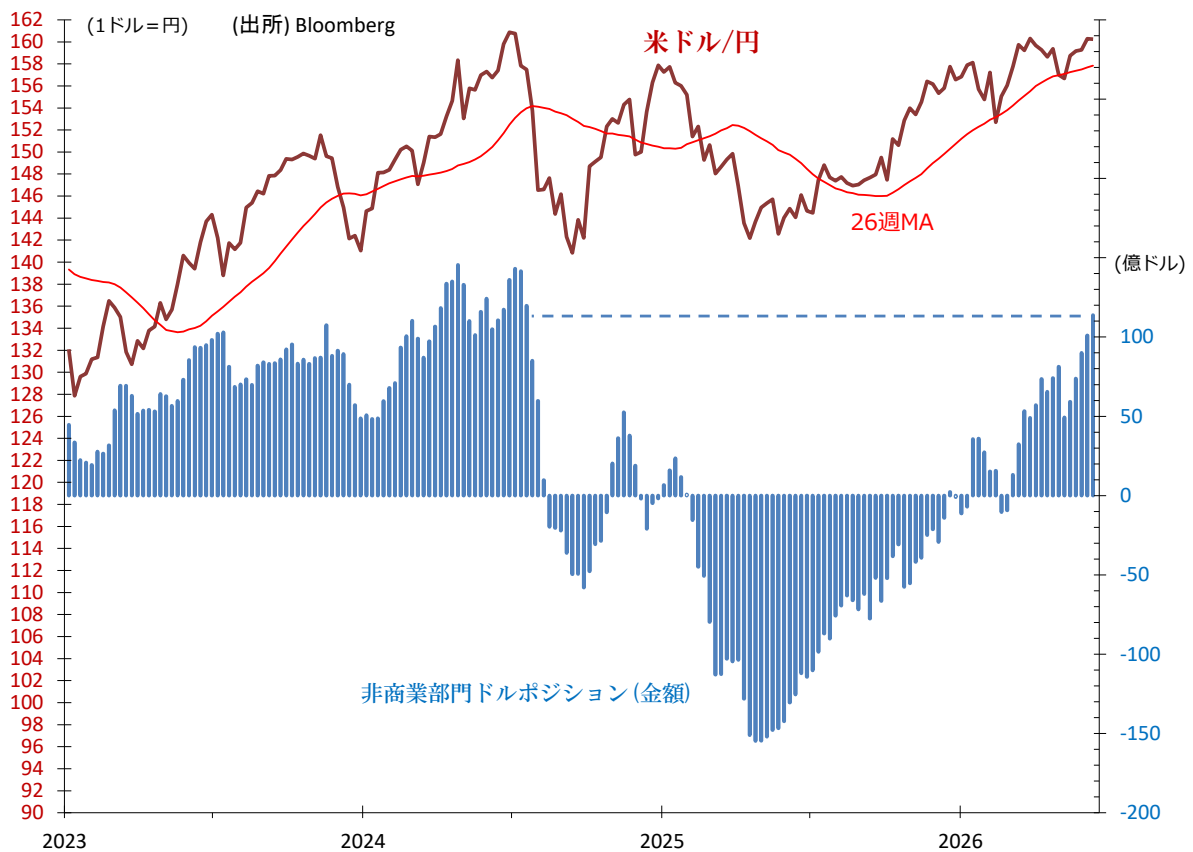
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.486 円]です。

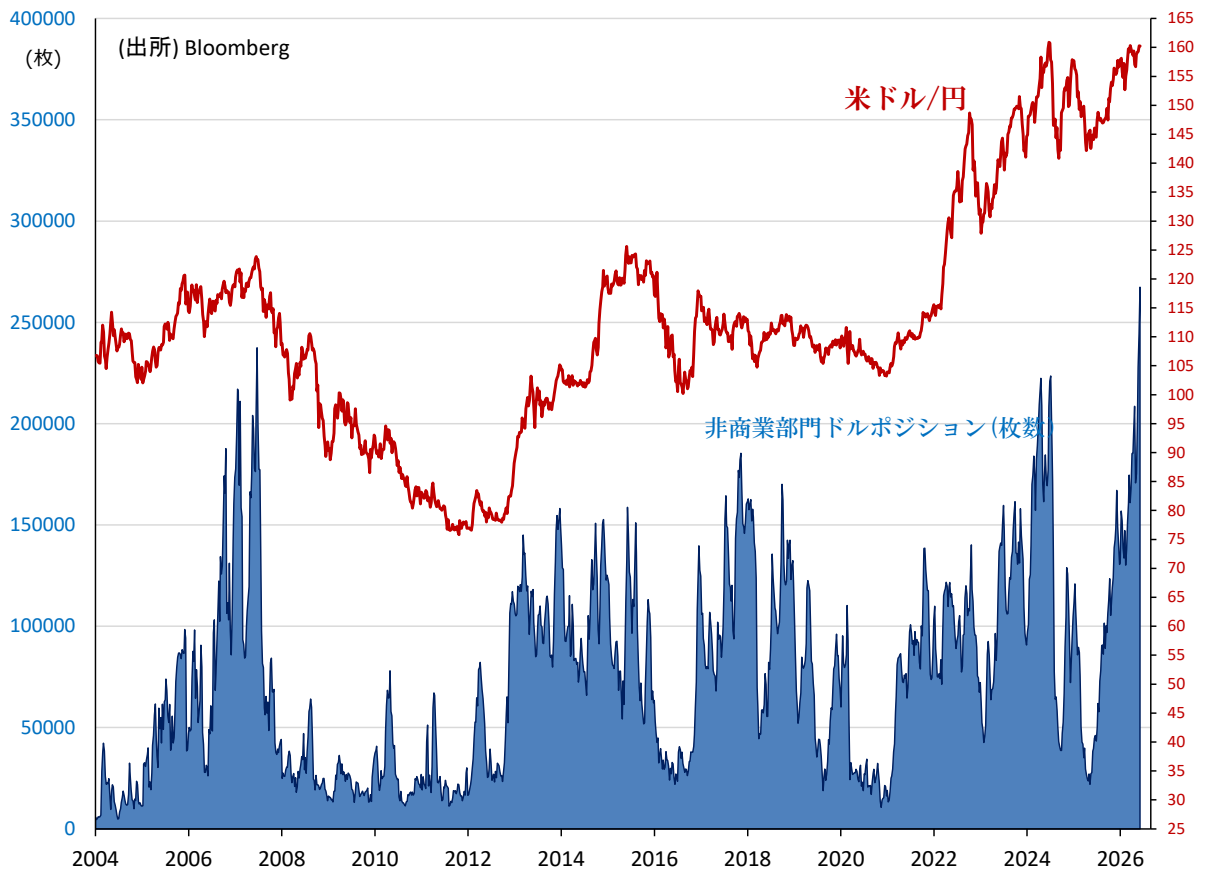
円売り持ち高が 3 週連続で拡大 (2026 年 6 月 9 日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の 101.0 億ドルから 113.75 億ドルへ 5 週続けて拡大しました。円売り持ち高は、円買い介入が入ったときの水準(81.2 億ドル、4/28 時点)を既に大きく上回り、24 年 7 月以来の高水準です。

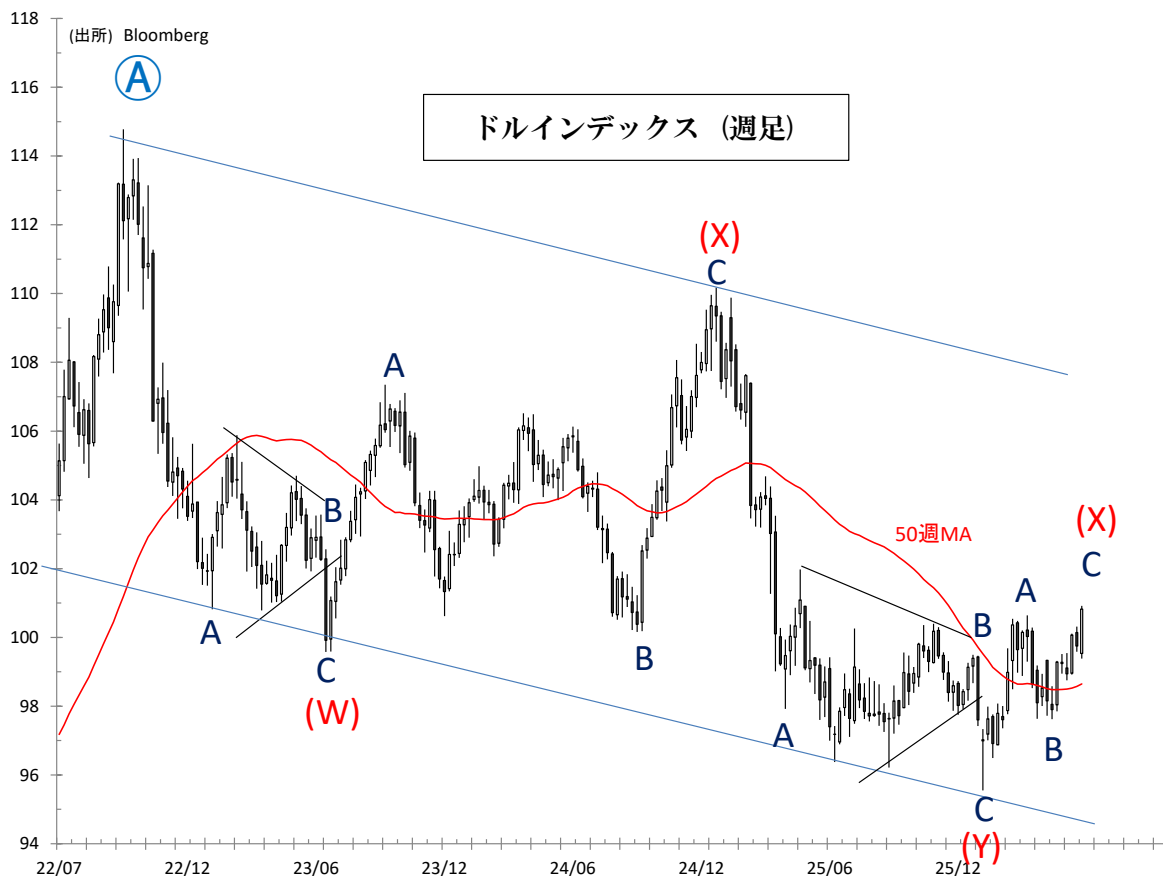
円売り枚数は過去最大を更新

投機筋の円売り持ち枚数は、6 月 9 日時点で 26.67 万枚と 2 週続けて過去最大となりました。円高へのマグマは溜まっています。





ドルインデックス (ドル指数)



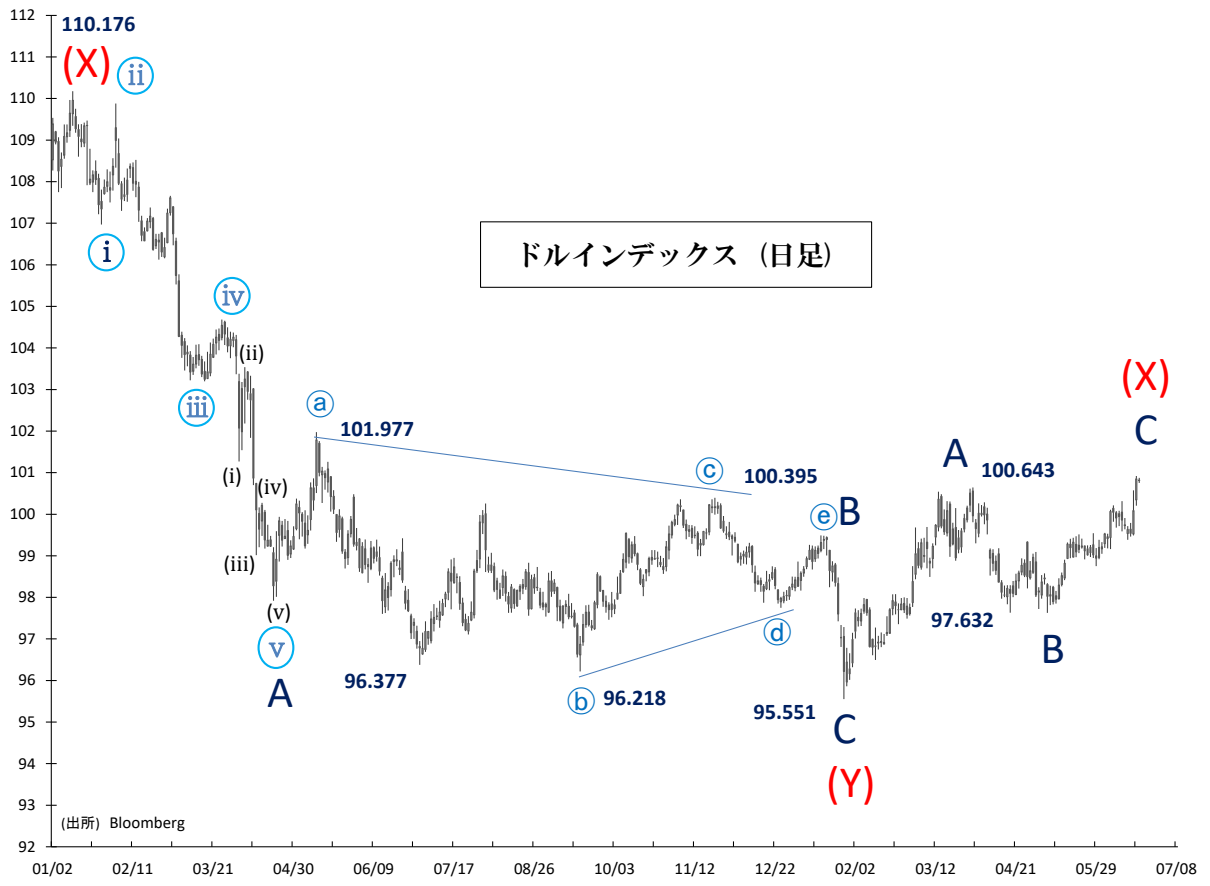
【エリオット波動分析】

6月18日、一時100.918と約1年1カ月ぶりドル高となりました。
この動きにより、波動カウントを改める必要が生まれました。

まず最初に、22年9月高値からのドル安⑥波が、今年1月安値で完成した可能性は低いでしょう。
①波のドル高は通算14.5年(08年3月⇒22年9月)かかりました。仮に⑥波の終わりが今年1月だったとすると、22年9月から通算3年4カ月しか経っておらず、①波とは日柄的なバランスを著しく欠いてしまいます。

結論的には、⑥波は「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っているとみられます。
今年1月安値からのドル高は、⑥波中の(X)波に位置付けられ、それが終わると、次は3番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われれます。

さて(X)波のドル高は、当面[101.138-102.717]を目指しているとみられます。その辺りで頭打ちとなり、(Z)波のドル安へ移行していく可能性があり注目です。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
